

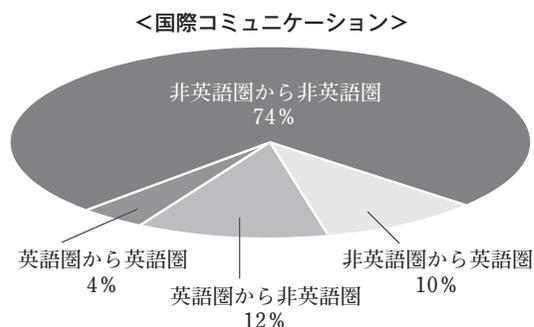
アメリカの代表的スピーチの修辞について

— プレゼンテーションへの応用 —

海 老 澤 邦 江*

1. 人を惹きつけることばの力

現在、45 か国では英語が公用語だが、世界には 6,000 以上の言語が存在し、世界の 12% の人々が英語を公用語・母語として話し、残りの 88% の人々にとっては第一言語ではない。この数値によって、英語が語学教育の中で必ずしも必要ではないのではないかという疑問をもたれるかもしれないが、一方で、英語を公用語もしくは母国語としない人々（以下非ネイティブ）が非英語圏に訪れる割合から国際コミュニケーションの変容を示す統計がある⁽¹⁾。



これは 2004 年の統計で、海外渡航者 7 億 6300 万人のうち、英語圏から英語圏に渡航する割合が 4% に過ぎないのに対し、現在、非英語圏同志の往来が全体の四分の三近くに昇っている。非英語によるコミュニケーションの可能性も大いにあるが、*English Next* (2006) において示唆されてい

ることは、非英語圏の人同士が英語でコミュニケーションを取る機会が増大するということだ。

2012 年度医学・生理学部門でノーベル賞を受賞した山中伸弥教授のスピーチにいつもある期待を持って注目する人が多い。というのも、今まで一般に知られていなかった一人の研究者が、世界が瞠目する発見を行いノーベル賞受賞が決まったことの他に、朴訥実直な風貌でエリート研究者のイメージを纏う人物の話すことばというのは、さぞ専門語が多い難解で堅苦しいものであろうという一般的思惑をすっかり裏切って、ところどころに挿入されるユーモアで人を沸かせるからである。その笑いが、科学に不案内な聴衆を安心させる。そして、さらに話者の話に耳を傾けようとする。山中教授は、プレゼンテーションの秘訣を研究先のアメリカで学んだという。そして、ストックホルムでは、やはり多くのユーモアを交え英語圏のみならず非英語圏の聴衆を前に会場を沸かせた山中氏のレクチャーは記憶に新しい⁽²⁾。

本論においては、英語によるスピーチの修辞を学ぶことにより、日本語表現にも応用できるのではないかという視点から、実際に授業で使用している教材を活用し、その実践を示すものである。そもそも、日本語自体が豊かな表現を持つ言語であるし、英語と日本語の言語システムの相違から、英語表現から日本語表現への援用は無用と思われるかもしれないが、修辞については西洋言語により多くの定義と知的蓄積が見出されると考える。ことばの修辞技法を学ぶことで、効果的なスピーチへの理解がより深くなされるのではないかと、それを豊かな日本語表現として学生たちが活用でき

* 江戸川大学 情報文化学科教授

るのではないかという意図を持ち、現在、英語コミュニケーションの授業で実践している。また、それとともに、英語のスピーチは、その話された時代背景や話者の感情や思想が直接的に反映されている。そうした言語の背後にある社会を知ることが、異文化理解および国際理解の点からも有効だと考えている。以下に、アメリカ独立から約200年の間になされたエポックメイキングのスピーチを取り上げ、なぜこうしたスピーチに人口に膾炙し現代にも伝えられるモデルスピーチと考えられるのか、効果的なプレゼンテーションのモデルとして日本語のプレゼンテーションにどのように援用できるのかを修辞の観点から授業の実践例をあげて検討してみたい。

2. アメリカの誕生—トマス・ジェファソンの独立宣言

- ① 天の人を生ずるは億兆皆同一徹にて、之に付与するに動かす可からざるの通義を以てす。即ち其通義とは人の自ら生命を保し自由を求め幸福を祈るの類にて、他より之を如何ともす可らざるものなり。
- ② われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命・自由・および幸福の追求の含まれることを信ずる。

トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743-1826) が取りまとめたアメリカ独立宣言の一節を訳したもののだが、前者は1866年の福澤論吉、後者は1970年代岩波文庫に収められた現代語訳である。そして、以下が翻訳文に相当する原文である。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by the Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.

この一節は、アメリカ合衆国の理念となる部分で、以降、現代のオバマ大統領のスピーチにも反映されている。柳父章氏は、翻訳された上記の2例を比較し訳語の異なる部分が翻訳が困難な部分、同様な訳語が当てられている部分は、100年の時の隔たりの中でも定着し翻訳がし易い部分としている。だが、それでも、日本語で思考した場合、理解し易いと思えることばこそ、「私たち日本人を欺くことば」で、<Creator, Rights, Liberty, equal>といった抽象的、概念的な意味のことばであると述べている⁽³⁾。柳父氏は、日本語の中にこうした抽象的、概念的ことばを翻訳語として使用する時、そこに<カセット> (箱) 効果が生まれると主張した。新語としての翻訳語は、私たちにとって真新しく興味を惹かれ、幾度となく繰り返し使用され、意味を持ってゆく。つまり、ことばが私たちの日常言語のなかで機能を持ち、その存在価値が認識され定着するというのである。それとともに、その語の定義に関しては、原語との一対一対応の意味に縛られず、翻訳語にはその語に常に多義的な意味や曖昧性が纏うということも指摘する⁽⁴⁾。

現在、翻訳語の誕生から定着までの時間を経て、そもそも西洋から移入された概念的、抽象的用語が自然な日本語として使用されているのだが、シンタクスの観点から見ると、私たちは、さらに英文のシンタクスを移入し続けているように思える。上記の一節をもう一つの現代訳で見よう⁽⁵⁾。

- ③ 私たちは次の真理を自明のものだと考える。すなわち、人々はみな平等に作られており、その創造主によって譲渡できない権利を与えられている。その権利の中には、生命、自由、そして幸福の追求の権利がある。

① (福澤訳) は、“these truths to be self-evident” に対応する直接的な訳出がみあたらず、まず、“all men are created equal” から訳出している。② (斉藤訳) は、日本語のシンタクスに従って、“hold”

の意味を「信ずる」の述語を文の最後に持ってきている。③（上岡訳）は、訳語としては②に従いながらも、シNTAX上は英語の原文に従って、ある意味では、直訳である。現代の学生にとって一番わかり易いものはどれかという、③を選択する者が圧倒的に多い。①福澤訳は用語的に最も難しく、②齊藤訳は理解できるが、「造物主」「天賦」「自明」など幾つか聞きなれない用語が含まれている。③上岡訳は、「自明」「譲渡できない」という真意は曖昧だが、一番理解しやすいという結果であった⁽⁶⁾。

それでは、なぜ③が一番わかり易いのかということだが、学生たちは簡潔であるという印象を持つ。というのも、③の訳は、英語のシNTAXに従って言説が構築されているので、まず、「自明の真理」の存在が主張され、「人はみな平等に作られている」という大前提があり、それに続いて「生命、自由、そして幸福の追求の権利」があると提示され「自明の真理」を意味する道筋を辿れる。そして、この一節が、日本語では3つの単文で構成され、意味を補足する接続語や指示語の使用が文意をより明確にしている。現代の日本語解釈が英文構造に近づく傾向にあるように思える。

この一節は一文構成でありながらも、節の連続によってロジカルな思考の道筋が辿ることができると同時に視覚的分析提示が可能である。

These truths=self-evident

↓

- (1) all men are created equal.
- (2) all men are endowed by the Creator with certain unalienable Rights.
- (3) among these Rights are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.

この一節が有機的な構文構成を持ったものであることを提示した上で、英文スピーチにおいて、冒頭に印象的な用語を用いて、まずそのテーマを提示、そしてその内容を具体的に述べる。その強調の方法として、<3つ>を並置する方法がしばしば取られ重要であるという説明を行う。その上

で、(3)の節にも、もう一組の<3つ>の並置、すなわち、“Life, Liberty and the pursuit of Happiness”の存在を発見させる。この英文の中で、学生たちにとって概念的に把握するのが最もむづかしい用語は、“the Creator”である。現代のカタカナ語「クリエイター」に馴染む学生たちにとっては、「神」がなぜ「クリエイター」と結びつくのか、即座には理解しにくいのである。この点において、神と人との関係についてキリスト教の基本概念を創世記の話を交えて解説する必要がある。その上で、(1)の節で使用される“created”（創られた）という用語との関係性に結びつけることができる。

3. 民主主義の理念—リンカーンのゲティスバーグでのスピーチ

アメリカ建国から80有余年が経過し、国を二分して戦われた南北戦争が終結することで、アメリカがひとつの国としてのまとまりを形成する。その最中に行われたエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln, 1809-1865) の激戦地ゲティスバーグでの演説は、新生アメリカを象徴すると言えよう。雄弁家として著名であったエドワード・エヴァレット (Edward Everett, 1794-1865) が一万語以上にも及ぶ演説を2時間あまりかけて行った直後に、この演説はわずか272語で3分ほどの長さでまとめられた。学生たちは、最後の「人民の、人民による、人民のための」という有名なフレーズをよく知っている。この演説がなされる状況についての予備知識は演説の内容のより深い理解には不可欠である。また、この演説は短いものであるにも関わらず、修辞的に密度の濃い技法が使用されているので、論を進める便宜上、全文を以下に示す。

Four score and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation, conceived in liberty and dedicated to the proposition that all men are created equal. Now we are engaged in a great civil war,

testing whether that nation or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle-field of that war. We have come to dedicate a portion of that field as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But, in a larger sense, we can not dedicate — we can not consecrate — we can not hallow — this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us — that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion — that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain — that this nation, under God, shall have a new birth of freedom — and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

第一パラグラフの冒頭に、独立宣言に詠われた“All men are created equal”が引用されている。リンカーン自身が、この10か月前に発布した「奴隷解放宣言」を伏線としつつ、独立時における理念の喚起を行っている。つまり、建国の理念に従い政策を行っている最中にもかかわらず、南北に分かれて戦っている市民戦争が、理念のみならず国の存立さえも脅かす危機に瀕していると訴えているのだ。第二パラグラフにおいては、この地で戦死した兵士たちを埋葬するための墓地の献納式

に参集していることが述べられる。

第三パラグラフの冒頭に逆説の“But”を用いることで、この演説は大きな展開を示す。

“we can not dedicate — we can not consecrate — we can not hallow — this ground.”の一行と次行以下に見られる対比の修辞はたいへん精緻である。〈生者〉としての“we”と〈戦死者もしくは戦闘に参加している兵士たち〉としての“they”が鮮やかな対比の中で語られているからだ。「私たち」は、墓地を「献納」「dedicate」しようと参集しているのだが、実は、「私たち」〈生者〉は、〈戦没者や兵士たち〉に対してこの土地を捧げる高みに立つことへの為政者としての謙虚な立場を表明している。

“The world will little note, nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here.”の一行は、逆説の接続詞“but”を挟んで見事な対比を示す。つまり、動詞部“will little note, nor long remember”と“can never forget”との対比、そして名詞節の“what we say here”と“what they did here”との対比である。〈忘却〉と〈記憶〉、そして〈言説〉と〈行為〉との対比が現れ、〈言説〉は〈忘却〉と、〈行為〉は〈記憶〉と結びつけられている。リンカーンは、実践の戦いから離れて命の危機に晒されない自らたちの〈言説〉は〈忘却〉され、一方、生を賭して戦った、そして戦っている者たちの〈行為〉は〈記憶〉に刻まれ、「勇者」として称え、彼らに対して一貫して謙虚であろうとする。また、この部分は行為や行動、記憶の継承といったアメリカの価値観を伺わせ、後のジョン・F・ケネディの演説にもこの価値観が反映している。

さらに“It is for us the living…”の繰り返しの2行で、結論への展開が用意される。それは、リンカーンにとっては為政者としての態度表明であるが、〈生者〉の役割を明らかにしている。戦没者たちが戦い推し進めてきた未完の仕事“the unfinished work”と表現し、次行において「私たちに残された」「the great task」と言い換えている。その「偉業」こそが、残された生者たちが受け継ぎ完遂しなければならないこと、そのことに

よってのみ死者たちの犠牲が無駄にならないことを繰り返される that 節で畳みかけ、「偉業」の内容 “that this nation, under God, shall have a new birth of freedom — and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.” を最後の結論として締めくくるのである。

4. 能動性を求める

— J. F. ケネディの大統領就任演説⁽⁷⁾

ジョン・F・ケネディ (John F. Kennedy, 1917–63) は、この就任演説で、建国精神をより一層強調している。その時代背景として、第二次世界大戦以降、＜自由主義＞と＜共産主義＞との激しい軋轢があり、再び大戦が起こるのではないかという不穏な政治情勢が、この就任演説の基調を厳しいものになっている。アメリカ合衆国の大統領として、自国を守るために強固な姿勢を示すのだが、その拠り所となるのが建国の理念である。この演説には、その正当な継承者としての表現「人の権利が得られるのは国家の寛大さからではなく、神の手からであるという信念」“the belief that the rights of man come not from the generosity of the state but from the hand of God.” や「私たちはあの初めての革命の継承者なのです」“we are the heirs of that first revolution.”、あるいは「私たちの祖先からの遺産を誇り」“proud of our ancient heritage” に見られるように、建国理念の継承を特に重視する。そして「松明はアメリカの新しい世代に渡された」“the torch has been passed to a new generation of Americans” と父祖から若い世代に継承されたことを比喩によって表現している。さらに、国際情勢の緊張が高まる中で、その理念を守るためには、「自由の存続と遂行を確実にするためには、いかなる代価を払うことも、いかなる責務を負うことも、いかなる苦難に立ち向かうことも、いかなる友人をも支援することも、またいかなる敵と相対することも厭わない」“we shall pay any price, bear any burden, meet any hardship, support any friend, oppose

any foe to assure the survival and the success of liberty.” と “any” の反復によって、その覚悟と強い意志を打ち出している。この演説では、母音の /e/, /i/, /i:/ といった音や音節の短い語が多用され、リズムとしては強弱を基本として強い語調を響かせている。また、好戦的なイメージを喚起する用語選択も立ち向かう姿勢を強調している。

ケネディが当時のアメリカの活力の象徴であると同時に、一方で、この演説には、文学的修辞であるとともに、アメリカ人にとっての象徴を喚起するイメージを使うことに成功している。それは、“the torch” が指し示すものである。硬質で強固なことばの中で、この語だけが温もりを感じさせ異彩を放つ。建国理念の「松明」であり、世界中の国から移民してきた者たちによって構成されている移民国家にとって、自由の女神が高く掲げる「松明」は、その名の如く「自由」の象徴だからである。特に 20 世紀前半は、希望を抱いてヨーロッパから政治的、経済的理由から大西洋を渡ってきた人々にとって、初めて目にする自由の女神像は、自由と平等そして機会均等の象徴であり、これからの自らの人生を照らし、指標となる導きの松明であった。聴衆にイメージを想起させるかのように、「私たちがこの努力にもたらす活力、信仰、献身が私たちの国を、それに奉仕する者たちすべてを照らし、その炎の輝きが世界を本当に照らすことができるのです」“The energy, the faith, the devotion which we bring to this endeavor will light our country and all who serve it — and the glow from that fire can truly light the world” とアメリカが建国以来、その旗印のもとにまとまってきたことを強く印象付け、愛国心の高揚に効果をもたらしている。

最後の締めくくりとして、まず、アメリカ国民に、次には世界の人々に、同胞としての呼びかけを行う。聴衆への呼びかけは、政策だけに限らず感情においても、同じ意識の共有を促すという点において効果的である。自国民だけでなく、世界へのメッセージという展開を行い、アメリカのオープンネスを強調する。また、さらに重要な

は、為政者側から聴衆に向かって＜行動＞を求めている点である。結論に至る前段階で、ケネディは為政者としての責任を果たすことを明言している。ここで、意識の共有化だけでなく、＜行動＞の共有化を促し能動的に行動することを求める。これは、為政者側から利益を求めがちになる市民に対して、政治への参画と責任の共有を求めるものであるが、ある意味で歯に衣を着せぬ一般市民への呼びかけは、ケネディ政権の強いリーダーシップのもとに、より多くの支持と連帯を生み出すことにつながってゆく。

5. <アメリカの夢>

—マルティン・ルーサー・キング牧師の夢⁽⁸⁾

1960年代、ケネディが、新たなフロンティア精神の鼓舞を目指していたのは、その根底には＜アメリカの夢>の実現があった。世界各地からアメリカに移住する移民たちの願望は、自由、平等、機会均等といった理念に支えられた土地での幸福の実現である。それは、個人の能力・努力次第で社会の階梯を昇り成功を勝ち得ることができると＜アメリカの夢>の実現でもあった。特に19世紀末から20世紀初頭にかけて、南ヨーロッパや東欧諸国から多くの移民を受け入れ、新興移民たちには、多くの機会が得られるようなく約束の土地にも思っていた。しかし、植民地時代から300年以上の歳月を経て、リンカーンの奴隷解放宣言から100年以後の現在もなお、黒人の社会的地位は低く、差別の実態は遅々として改善されていない。アメリカの黒人にとって、＜アメリカの夢>は幻想でしかなかったと言えるだろう。ワシントン大行進の際に行われたキング (Martin Luther King, Jr., 1929-1968) の演説は、＜アメリカの夢>が幻想であってはならないという信念に裏打ちされている。というのも、この演説の半ばに次のように述べているからだ。

I say to you, today, my friends, that in spite of the difficulties and frustrations of the moment I still have a dream. It is a dream

deeply rooted in the American dream.

以降、見果てぬ夢ではなく、＜アメリカの夢>として実現可能な夢を願うかのように、キープレーズ “I have a dream.” は8回も執拗に繰り返される。それも、建国理念の根幹 “all men are created equal.” が本当の意味で実現されることがその夢のひとつであることを訴えている。つまり、本当の意味でアメリカは未だにそれを達成していないという言外の意味を響かせている。

この演説は、これまでの演説の中で最も文学的と言える。本来、文学的色彩の濃いものは演説としては歓迎されないのが通例だが、キングの演説は、その特色があって聴衆の心をつかんだ稀有な例ではなかろうか。例えば、黒人に対する差別の激しい地域ミシシッピ州の変容の願いを次のように表現する。

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a desert state, sweltering with the heat of injustice and oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

実際のミシシッピ州は、決して「砂漠の州」ではないが、当時の社会状況を比喩的に表現しているのである。「炎熱にうだるような汗をかく」という形容からは、かつて黒人が奴隷として畑仕事などの重労働に従事していた風景を想起するものもむつかしくない。「不正と迫害の炎熱地獄」の土地が「自由と正義のオアシス」に変容することを願う。この部分においても対比の比喩が効果的に使われている。また、人種差別・人種隔離政策を標榜するアラバマ州知事ジョージ・ウォーレス (George Wallace, 1919-1998) への批判 “the state of Alabama, whose governor’s lips are presently dripping with the words of interposition and nullification” は、あたかも汚い涎を流し続ける獣のように描写し、強い印象を残す比喩を使っている。授業においては、ジェファソンの草稿やリンカーンの奴隷解放宣言に言及し、およそ

200年に渡る人種差別の歴史の概観が可能である。また、こうした社会問題は、日本の学生にとっては決して身近ではないので、映画『ロング・ウォーク・ホーム』などを教材の活用によって補足できよう。

このように人種差別が横行する地域や人物に対する批判は厳しいが、その反対に、子供たちの未来のイメージは、聖職者キングの優しさが溢れる牧歌的イメージに彩られる。

“the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at a table of brotherhood.”

“my four children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.”

“little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls and walk together as sisters and brothers.”

これらすべて<夢>の内容である。ここで留意したいのは、子供たちの将来を語っているという点である。キング自身が、現在の現実に対して決して楽観視していない。むしろ、本当の平等は、自分の世代ではなく、せめて子供たちの世代には実現されてほしいという将来に託した<夢>なのだ。当時の差別問題が、キングにとっていかに根深いものであるということを表していると言えるだろう。そして、この平和な子供のイメージは、キングの日常生活から紡ぎだされた切実な懇願であることが容易に理解できる。最後の夢に「低きところは高く、高きところは低く、険しいところは平らに」とイザヤ書からの引用を用いて、平等の実現をあらためて訴える⁽⁹⁾。そして、ここまで「夢」「a dream」と表現しているのだが、演説の終盤に向かって“our hope”と言い換え、さらに“the faith”という言葉に変わってゆく。ここに、「信念」と言い換える理由が明確となる。「夢」では実現に到らないまま終わってしまう可能性がある

り、「信念」をもって実現しなければならないという強い意志が感じられるのだ。

この演説の後半の特徴は、キーフレーズ“I have a dream.”、“the faith”、“Let freedom ring”の繰り返しである。“I have a dream.”は9回、“the faith”は3回、“Let freedom ring”は10回繰り返される。自由を最も重んじるアメリカ国民に対して、演説の最後に「自由の鐘を鳴り響かせよう」と訴え続けるのである。それが、キングの究極に求める「夢」に収斂してゆく。

6. まとめ

プレゼンテーションが一般的に行われる現代、メッセージを明瞭に適切な言語表現で伝える技術が求められている。著名な演説には、上述したように、効果的な修辞的言語表現が多く散見される。しかし、これらは、意図を持って学習しなければ、修辞技巧が施されているかどうか判別できないこともある。メッセージを正しく伝達するという基本から、さらに表情豊かな表現を求められる際、どのような言語にも効果的な修辞が活用される。

アリストテレス (Aristotle, 384-322 B. C.) は、『弁論術』第1巻の中で、言論を通して説得に導く3つの要素「(1) 論者の人柄 (2) 聴衆の心がある状態に導かれること (3) 言論の中に真なること、もしくはそう見えることを証明すること」を挙げている。第3巻は、表現方法に関する詳細な検討が加えられており、現代のプレゼンテーションにも応用可能な修辞の効用を例示している。アリストテレスは、演説用の表現は、書記されたものが一番であると言う。なぜなら、演説の本来の働きは朗読にあるからだとしている。それ故に、従来等閑視されてきた「演技的語り口」が最大の効果を挙げると述べ音声重視している⁽¹⁰⁾。

語りにおける演技は音声においてなされる。すなわち、それぞれの感情に合わせて、どのように声を用いるべきであるか… (中略) …つまり、考慮する点は三つ、すなわち、声の大きさ、調子、リズムである。

実際、リンカーンの演説は、哀しい調子で低い声で語られたという。

また、文章表現において明瞭さと表現の適切さを重視し、また、感情と人柄が釣り合っていれば、感情をこめて語るのには、聴衆の共感を得られやすい。語彙の修辭的表現として比喩が肝要であると述べている。というのも、散文において効果的表現を生み出す手段は少なく、比喩が最も効果的であり、文章に明瞭さと快さと斬新さを与えるからだ。他の修辭技法としては、適切な接続詞の使用、節の並置（対句）と対置（対比）や繰り返しの重要性を指摘している⁽¹⁾。

アリストテレスが指摘する弁論術の適切な技術・技法は、現在のプレゼンテーションにも同様に適用できる。本論で採りあげた4本の演説は、書記された草稿が基本となっているのは無論のこととして、音声的に配慮があり、適切な比喩、並置や対比、繰り返しを活用し、言論に精彩さと明瞭さを与えている。特に2時間余りに渡る長口舌のエヴェレットの後に、わずかに数分に収めたリンカーンの演説が、現代では永遠に記憶される演説として残っている事実は象徴的な例である。また、1960年代のケネディとキングの演説は、同時代に共通する感覚や問題意識から生まれるテーマを扱い、基調の違いがあるにせよ、アメリカの活力や未来への希望を感じさせるものである。時代の思潮の勢いも手伝って、2人のリーダーによる演説が、歴史に残るものになったのは単に偶然ではないだろう。ともに社会問題として重いテーマを扱っているのだから、使用される語彙は、硬質なものが多く、その一方で、それ強固さや硬さを中和するように、文学的な温もりを感じさせる比喩やイメージを適切に織り込んでいる。その音調は、強いリーダーシップと信念を印象付けるように＜強弱＞調を基本とした力強さを前面に出したものとなっている。

この流れの中に、21世紀のオバマ大統領(Barack Obama, 1961-)を位置づけるのは困難ではない。オバマ自身もまた、建国理念の継承者であることを表明し、現代の国際情勢が、1960

年代とは異なったパラダイムにおいて世界の安全の危機に瀕しているという点では共通しており、オバマの大統領就任演説はケネディの演説を意識している。アメリカにおけるエポックメイキングとなる演説は、社会学的、歴史的、文化的に興味深いだけでなく、文学としてとらえても熟読に値する。演説は、メッセージが直接的であればあるほど、その瞬間においては、訴える力があるだろう。しかし、後世にまで語り継がれる演説には、その言説と表現が高い質を持っていなければならない。さらには、演説者の息遣いまでもが感じられなければならない。

アリストテレスは、『弁論術』において表現の技法を詳細に語っているが、卓越した演説は、「人柄」によって決まると言う。演説は、明瞭で適切な文章表現・プレゼンテーション方法が技術として重要だが、根本的には＜話者の人となり＞に帰するのだ。修辭を活用しながら、論理的でかつ明瞭なことばでメッセージを構築する作業は、客観的分析的思考力を必要とすると同時に、主情的であってよい、もしくはその要素がなければ、人を感動させることができないとも言えるのだろう。

(1) David Graddol, *English Next* p. 29 (British Council, 2006)

(2) <http://www.nobelprize.org/>

(3) 柳父章 『翻訳とはなにか』6頁(法政大学出版局 1977年)

(4) 柳父 53～60頁

(5) 上岡伸雄編 『名演説で学ぶアメリカの歴史』21頁(研究社 2006年)③の翻訳を引用。

(6) 「英語によるコミュニケーション演習Ⅱ」の授業でアンケートを次の内容で行った。

トマス・ジェファソンの独立宣言の冒頭部分を翻訳した3つの文章についてのアンケート

1. 一番わかり易い文章はどれですか。番号で教えてください。
2. その理由を簡単に述べてください。
3. 上記の3つの文章中でわかりにくい、もしくはわからない動詞、形容詞、名詞を抜き出して書いてください。

結果

回答数 12

1. 一番わかり易い翻訳 ③(11名)
2. 日本語として一番わかりやすい。最もわかり易い単語で簡潔に説明している。先に主題がある。一文ではなく文が短い。など
3. ① 「天の人」, 「億兆皆同一徹」, 「通義」, 「以てす」, 「如何」, 「可らざる」など
 - ② 「天賦」, 「自明」, 「造物主」, 「含まれることを信ずる」
 - ③ 「自明」, 「譲渡できない」

(7) 考察対照にしたケネディの演説部分

The world is very different now. For man holds in his mortal hands the power to abolish all forms of human poverty and all forms of human life. And yet the same revolutionary beliefs for which our forebears fought are still at issues around the globe: the belief that the rights of man come not from the generosity of the state but from the hand of God.

We dare not forget today that we are the heirs of that first revolution. Let the word go forth from this time and place, to friend and foe alike, that the torch has been passed to a new generation of Americans — born in this century, tempered by war, disciplined by a hard and bitter peace, proud of our ancient heritage — and unwilling to witness or permit the slow undoing of those human rights to which this nation has always been committed today at home and around the world.

Let every nation know, whether it wishes us well or ill, that we shall pay any price, bear any burden, meet any hardship, support any friend, oppose any foe to assure the survival and the success of liberty. —

In the long history of the world, only a few generations have been granted the role of defending freedom in its hour of maximum danger. I do not shrink from this responsibility — I welcome it. I do not believe that any of us would exchange places with any other people or any other generation. The energy, the faith, the devotion which we bring to this endeavor will light our country and all who serve it — and the glow from that fire can truly light the world.

And so, my fellow Americans: Ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country.

My fellow citizens of the world: Ask not what America will do for you, but what together we can do for the freedom of man.

Finally, whether you are citizens of America or citizens of the world ask of us here the same high standards of strength and sacrifice which we ask of you. With a good conscience our only sure reward, with his-

tory the final judge of our deeds, let us go forth to lead the land we love, asking His blessing and His help, but knowing that here on earth God's work must truly be our own.

(8) 考察対象にしたキングの演説部分

I say to you today, my friends, that in spite of the difficulties and frustrations of the moment I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident; that all men are created equal."

I have a dream that one day on the red hills of Georgia the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at a table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a desert state, sweltering with the heat of injustice and oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a dream today...

I have a dream that one day the state of Alabama, whose governor's lips are presently dripping with the words of interposition and nullification, will be transformed into a situation where little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls and walk together as sisters and brothers.

I have a dream today.

I have a dream that one day every valley shall be exalted, every hill and mountain shall be made low, the rough places will be made plains, and the crooked places will be made straight, and the glory of the Lord shall be revealed, and all flesh shall see it together.

This is our hope. This is the faith with which I return to the South. With this faith we will be able to hew out of the mountain of despair a stone of hope. With this faith we will be able to transform the jangling discords of our nation into a beautiful symphony of brotherhood. With this faith we will be able to work together, to pray together, to struggle together, to go to jail together, to stand up for freedom together, knowing that we will be free one day.

This will be the day when all of God's children will be able to sing with a new meaning, "My country, 'tis of thee, sweet land of liberty, of thee I sing. Land where my fathers died, land of the pilgrim's pride, from every mountainside, let freedom ring." And if America

is to be a great nation, this must become true. So let freedom ring from the prodigious hill-tops of New Hampshire. Let freedom ring from the mighty mountains of New York. Let freedom ring from the heightening Alleghenies of Pennsylvania! Let freedom ring from the snowcapped Rockies of Colorado! Let freedom ring from the curvaceous peaks of California! But not only that; let freedom ring from Stone Mountain of Georgia! Let freedom ring from Lookout Mountain Tennessee! Let freedom ring from every hill and every molehill of Mississippi. From every mountainside, let freedom ring.

When we let freedom ring, when we let it ring from every village and every hamlet, from every state and every city, we will be able to speed up that day when all of God's children, black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics, will be able to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual, "Free at last! free at last! thank God almighty, we are free at last!"

(9) Isaiah:40:4-5:4 Every valley shall be exalted, and every mountain and hill shall be made low: and the crooked shall be made straight, and the rough places plain: 5 And the glory of the Lord shall be revealed,

and all flesh shall see it together: (*The Holy Bible; King James version*)

- (10) 戸塚七郎訳 アリストテレス 『弁論術』 32 頁
(岩波文庫 1994 年)
- (11) アリストテレス 305-366 頁

参考文献

- David Graddol, *English Next* (British Council, 2006)
- Brian MacArthur ed., *The Penguin Book of Twentieth-century Speeches* (Penguin Books, 1993)
- 上岡伸雄編 『名演説で学ぶアメリカの歴史』 研究社 2006 年
- 柳父章 『翻訳とはなにか』 法政大学出版局 1977 年
- 高木八尺, 齊藤光訳 『リンカーン演説集』 岩波文庫 1999 年
- 戸塚七郎訳 アリストテレス 『弁論術』 岩波文庫 1994 年
- 高木八尺, 末延三次, 宮沢俊義訳 『人権宣言集』 岩波文庫 1971 年)
- 『CNN English Express』 編集部編 『オバマ大統領就任演説』 朝日出版 2009 年

Learning English Rhetoric through Famous American Speeches —Towards the Improvement of Students' Presentation Skills

Kunie Ebisawa

Abstract

Both communication and presentation skills are required in every domain of modern society. In the business world these skills are stressed. In terms of English language education, many Japanese educators and people in general hold the mis-guided notion that basic English communication, that is daily English conversation, is enough for Japanese college students. It is important for college students to have fundamental communication skill in English. Even after a long-time practice and trial of English conversation learning, however, the fact is that most Japanese students have not reached a sufficient level of fundamental communication. In addition to their lack of motivation to learn English, their hesitant attitude toward articulation may be responsible for this disappointing result. Most students believe that learning English is memorizing English words, which is not true. It seems necessary for them to know and learn how language is organized and constructed in the speech system.

Taking my English presentation class for an example, I intend to show that the students can learn organized structure of language and its cultural, social backgrounds through well-known American documents and speeches: Thomas Jefferson's the Declaration of Independence, Abraham Lincoln's Gettysburg's address, John F. Kennedy's Inaugural Address, Martin L. King's Address at the March on Washington, and Barack Obama's Inaugural Address. Historical documents and speeches show us crucial moments in American history and monumental social transformation. Based on the ideals of human rights found in the Declaration of the Independence, these other speeches are connected with one another and pass on the American idea of the state to later generations. The rhetoric of the speeches is subtle, elaborate and eloquent. The impressive, powerful, and clear rhetoric is still attractive enough to move modern young people.

Speeches are a form of presentation that is also interactive, because it needs an audience and elicits their active reaction. Besides learning how to make a good speech technically, students should know and understand that a good speech is also judged by its contents and the speaker's character.